

# 播磨みどり

JOSHIBI no.188



# つくること自体が、 かけがえのない報酬に。

複写した新聞や雑誌などを、張り子のようにして立体作品を紡ぎ出す。そんな独自の手法で注目を集めてきた播磨みどり氏。世界を股にかけると、マイペースで淡々と自身の芸術と向き合ってきた氏は「制作の過程こそが最大の報酬」と明言します。

Photo 橋本裕貴 Text 立古和智

ぬ

いぐるみを作ったり、絵を描いたり。物心ついた頃から、いつも夢中で何かを作っていました。小学4年生になると大人に混じって絵画教室に通うようになり、中学、高校でも絵を描き続けます。けれども「将来はアーティストになりたい」と大志を抱くタイプではありませんでした。自分のできるの絵を描くことだったから、それをマイペースで続けただけの話です。ところが女子美に入ると、ずっと続けてきた絵画から、版画へと転向します。版画特有の「複製」「量産」というコンセプトに惹かれたからです。これは版画と同じように「複製」「量産」される印刷物に、子どもの頃から親しんできたことも関係しているのかもしれない。カレンダーに描かれた名画。本で目にした戦時中の写真。海外の映画ポスター。思い返せば、日常のな

かでさまざまな印刷物に触れてきました。版画のコンセプトをさらに突き詰めて生まれたのが、コピー機で複写した印刷物を張り子のように組み合わせで立体化する私の表現スタイルです。幸いなことに「版画を専攻しているのに立体作品だなんて」と眉をひそめる先生は女子美にはいませんでした。私のチャレンジを温かく見守ってくれた先生方には本当に感謝しています。学生同士が火花を散らして競争する環境ではなかったことも、自分のペースで制作したい私には合っていました。作家としての基礎を固めていく時期を、女子美という恵まれた学び舎で過ごせたことは、とても幸運だったと思います。卒業後は就職ではなく、アルバイトをしながら作家活動が続ける道を選びました。ちようど作品を発表する機会をつかみ始めたタイミングだったし、何

播磨みどり（はりま・みどり）

2000年、女子美術大学芸術学部絵画科版画コースを卒業。2001年にサンフランシスコに移住し、2005年からはニューヨークを拠点に活動。現在は日本在住。2015年から2016年にかけて制作された、自らが生み出したゴミを素材とする一連の作品「Democracy Demonstrates」は韓国国立現代美術館コヤンレジデンシー（2015）やアメリカ・パークレーのKala Art Institute（2017）でも展示された。

よりも制作を続けていたかったからです。働いて、制作して、発表する。そんな生活を1年ほど続けた後に、サンフランシスコへと渡りました。初めは言葉の壁に戸惑いもありましたが、やることは同じです。働いて、制作して、発表する。幸いなことに渡米後も発表の機会に恵まれ、いくつかの賞もいただきました。その後、サンフランシスコでの4年間の活動を経て、ニューヨークへ。ここでも自分のペースで作品と向き合い続け

る日々を送ります。振り返ってみると、私は「アートで食べていこう」と決意したことがありません。ただ当たり前に制作を通して、その時の課題に取り組んできました。きっと女子美の友人たちも似たり寄ったりです。働いたり、育児をしたりしながら、淡々と制作を続けています。結局、私も含めてみんな





**Democracy Demonstrates** (インスタレーション)  
年代:2017 サイズ:インスタレーション サイズ可変  
素材:木材、アーカイバルピグメントプリント 撮影:兼子裕代  
協力:Kala Art Institute, Maho Kubota Gallery



**Year Without a Summer**  
年代:2017 サイズ:インスタレーション サイズ可変  
素材:ミクストメディア 撮影:木奥恵三  
協力:Maho Kubota Gallery



**Roadside Picnic Chapter Two**  
年代:2014 サイズ:インスタレーション サイズ可変  
素材:石膏、ワイヤー、鉄の棒、ポテトチップスの袋  
撮影:Nick McDonell  
協力:FLYNNDOG, Maho Kubota Gallery



らの助成を受けて香港に1年間滞在します。かつてアメリカやヨーロッパの作家から学んだことを踏まえて、再び中国や韓国をはじめとするアジアの作家から学び、それらを比較参照しながら自らの立ち位置を見出していきたいと思っています。そこで吸収したものが作品にどんな変化をもたらすのか。自分でも予想が付きませんが、リアリティのある作品を作りたいだけは強く願っています。「リアリティ」とは「自分にとって嘘がない」ということ。これからも制作の過程で味わえる欲びを存分に噛みしめながら、自分の芸術と向き合って行こうと思います。

作ることが生きることの一部なのだと思います。「アーティストにとって最大の報酬は何だろう?」と友人と話したことがあります。答えは「制作の過程そのもの」でした。もちろん作品が社会的、金銭的に評価されることも重要ですが、私はそれ以上にまず制作のなかで、何ものにも代えがたい満足を得ています。制作のプロセスを通して何かを発見するという欲びこそが、私を制作へと駆り立てるモチベーションです。10年以上にわたるアメリカ生活を終えて、2017年からは活動拠点を日本に移しました。アメリカで過ごすうちに、自分の歴史的、文化的背景について考えざるを得なかったことがきっかけです。アメリカの作家たちは、自然観も社会との向き合い方も、私とはまるで異なります。それは西洋と東洋の歴史や文化の違いそのものです。自分の根この部分には、アジアの感性が息づいている。そう自覚したことで、改めてアジアへの興味が芽生え、帰国するに至りました。2018年からは、文化庁か



## 大村智名誉理事長 セント・アンドルーズ大学から 名誉理学博士号を授与

2015年ノーベル生理学・医学賞を受賞されました本学名誉理事長である大村智先生が、スコットランドにある名門校、セント・アンドルーズ大学から名誉理学博士号を授与されました。イギリス・スコットランドにあるセント・アンドルーズ大学は1413年に創立。スコットランド最初の大学であり、英語圏全体の中でも3番目に古い大学です。英ケンブリッジ公爵・ウィリアム王子、キャサリン妃などの出身校としても知られています。

なお、セント・アンドルーズ大学からの名誉博士号の授与は日本人では2人目、自然科学の分野では初めての授与となります。去る6月27日、セント・アンドルーズ大学のヤングホールで授与式が開催され、Garry Taylor学長より、「ノーベル賞の受賞理由となった薬品開発、自然科学の分野における貢献及び発展を讃えて」などの授与理由のご紹介のあと、Sally Mapstone理事長より大村名誉理事長に名誉理学博士号が授与されました。



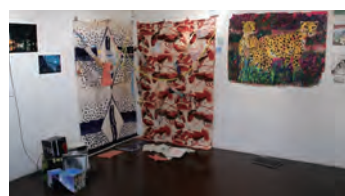
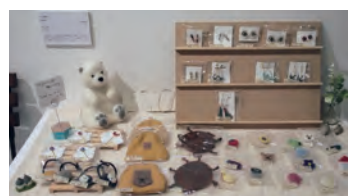
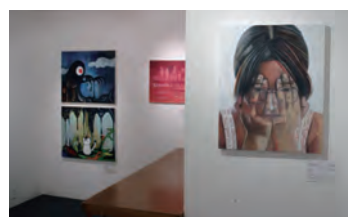
## 女子美史上最大のアートイベント 「じょしりき【女子力】」展を 原宿で開催！

2018年8月24日から3日間に渡ってデザインフェスタギャラリー原宿で「じょしりき【女子力】」展が開催されました。女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」力を込めたアートイベントとして、2017年に初めて開催された「じょしりき【女子力】」展。2回目となる今年は、女子美の在学生を中心に総勢200名が油絵・版画・日本画などの絵画作品、オリジナルイラスト、アクセサリーなどの作品展示・販売、パフォーマンスなどを行いました。本展は、「じょしりき【女子力】」展という展覧会名称や、サブカル文化発信地原宿で、夏休み期間中に開催さ

れることなどから、8月21日の毎日新聞の紙面に展覧会情報が掲載されるなど、開催前から注目を集めており、会期中は美術関係者のみならず、海外からの方など普段は本学に馴染みのない方も多く来場。会場のいたるところで来場者と出展学生が会話する光景がみられ、本学の魅力を広く知っていただく機会となりました。

「燃やせ、じょしりき。」という副題からも滲み出る本学ならではのアートイベントとして、女子美生「人ひとり」が持つさまざまな「力」を学外に発信し、大盛況のうちに幕を下ろしました。

「燃やせ、じょしりき。」という副題からも滲み出る本学ならではのアートイベントとして、女子美生「人ひとり」が持つさまざまな「力」を学外に発信し、大盛況のうちに幕を下ろしました。

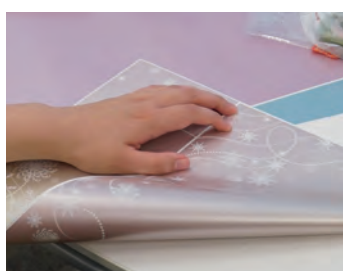




## 特別招聘教授 假屋崎省吾先生 特別講義開催

本学の特別招聘教授である假屋崎省吾先生をお迎えした特別講義が、4月27日と6月22日に杉並キャンパスで開催されました。假屋崎先生は国際的な舞台での華道のお仕事や、着物、ジュエリー、スカーフ、ガラス器、ファッション雑貨などのデザイン・プロデュースも手掛ける多彩な華道家で、さまざまなメディアにも出演し、幅広く活躍されています。1回目の講義では、いけばなの説明を交えながら作品制作についてお話いただきました。「いけばなは、自然界で完成された美を器、花材、空間、花をいける人の4つの出会いで、新たな美へと自分の手によって生み出す。これはインテリアや服、彫刻、何でも当てはまる」と、假屋崎先生。また、「作品を制作するときは、作品から離れて客観的に見るのも大切」と、学生に向けてアド

バイスをいただきました。2回目の講義では、山口県にある山口きらら博記念公園で開催された「山口ゆめ花博」のお仕事についてご紹介いただきました。假屋崎先生は会場でフラワーインスタレーションの展示やワークショップを開催。親子でいけばなを楽しめる企画「花育ワークショップ」では、ピンクのカーネーションを使用したティペアのフラワーアレンジメントや、昨年行われたワークショップの様子もあわせてお話いただきました。2回の講義ではそれぞれ、季節の花材を使ったいけばなのデモンストレーションが行われ、美しい作品が完成すると会場からは大きな拍手が湧き上がりました。学生たちとコミュニケーションを取りながら行う假屋崎先生の講義はとても楽しく、終始笑顔で聴講する学生の姿が印象的でした。



富士ゼロックス株式会社と本学特別招聘教授の假屋崎省吾先生、そして女子美生が力を合わせ、アイデアと最新デジタル印刷技術で希望の花をつくろうというプロジェクトが実施されました。[Flowers of Iridescent]—明日への希望の花を創る—と名付けられたプロジェクトは、全学科から参加者を募り、富士ゼロックス社のデジタル印刷機で印刷したゴールドやシルバー、メタリックカラーの紙媒体を素材として、学生たちが試行錯誤を繰り返し、合計170本の個性あふれるバラが制作されました。7月、富士ゼロックス社ショールームにおいて、プロジェクトに参加した学生たちが見守る中、個性が宿ったアートな花々は假屋崎先生の手により、見事に1つの作品として仕上げられ、世界に1つしかない「明日への希望の花」が完成しました。参加した学

## 假屋崎省吾先生×富士ゼロックス×女子美

生からは「假屋崎先生が個性を調和させて1つに仕上げていくのがすごい」、「1本ずつ丁寧に生けていたでいて感動しました」などの感想を聞くことができました。また、本プロジェクトを監修した副学長の小林信恵先生からも「様々なジャンルの作り手が、各自の持ち味を生かしてデザインし、新たな技術と共に作品を制作するということは、学生たちにとって良い刺激になりました。今後も創造の幅を広げてくれると思います」と、学生の今後の制作活動に期待するお話がありました。





# 四美大アラムナイ企画「美術を楽しむ日」記念イベント 『美術が育む想像力・創造力』を杉並キャンパスにて開催



女子美術大学同窓会、多摩美術大学校友会、東京造形大学校友会、武蔵野美術大学校友会からなる四美大校友会同窓会連合「四美大アラムナイ」は、芸術の秋として親しまれている季節の10月2日を「美術を楽しむ日」として記念日申請し、一般社団法人日本記念日協会に登録認定されました。これに伴い、四美大アラムナイのシンボルマークが四美大在学生・卒業生の公募から選定。以降、人々がもつと身近に美術を感じて体験する機会を持ち、美術が育む想像力・創造力を伝えるべく、さまざまな活動を企画展開しています。

2018年10月6日、第1回「美術を楽しむ日」記念イベントとして、本学客員教授で女優の桃井かおり先生をはじめ、犬童一心氏（映画監督、CMディレクター／東京造形大学校友会会長）、東良雅人氏（文部科学省初等中等教育局視学官）、降旗千賀子氏（目黒区美術館学芸員）をお迎えした講演・トークライブを杉並キャンパス7号館7201講義室にて開催

しました。事前告知の段階から大きな注目を集め、参加申し込みも早くから定員に達していた本イベント。第1部は東良氏による「学校で育む生涯にわたって美術を楽しむ心」、降旗氏による「美術を楽しむヒント」美術館のワークショップ」の講演が行われ、第2部は地主広明氏（東京造形大学 室内建築専攻領域 教授）の司会進行で桃井先生と犬童氏

によるトークライブ「美術がわたしたちにくれたもの」が行われました。冒頭では桃井先生が女子美で過ごした少女時代のエピソードについて触れられ会場は和やかな雰囲気スタート。中盤、AI時代の到来に美術やデザインがどのように関わってくるかについてトークが展開され、「美術、芸術という一見何の役にも立たないものの中にこそ何か未来がある気がするんです。今後必要なものを考えていくときに、AI技術に解決できないのは私たちがいま手

にしている美術の世界だけだと。そこに、これから先を生きていく『ヒント』があるような気がするんです」と、力強くお話された桃井先生の姿が印象的でした。講演・トークライブ共にたくさんの方にお越しいただき盛況のうちに閉幕した今回の記念イベント。「美術を楽しむ日」にちなみ、来場者の方々がゲスト四氏や各大学関係者と改めて美術の在り方について深く考える機会になりました。



四美大アラムナイ  
シンボルマーク



「美術を楽しむ日」の記念日登録認定に合わせてシンボルマークができました。シンボルカラーの緑は四美大校友会同窓会の前向きな若さと協調を表すとともに、穏やかでいて活気のある美術大学のイメージを表現しています。四美大在学生、卒業生から公募して選ばれました。



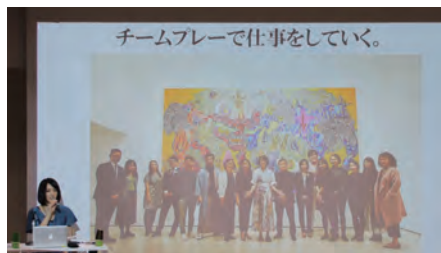
# 小松美羽さん 特別講演会で自身の生きざまを語る

## 「The World of Prayer” MIWA KOMATSU 小松美羽展（祈り）」 軽井沢ニューアートミュージアムにて開催



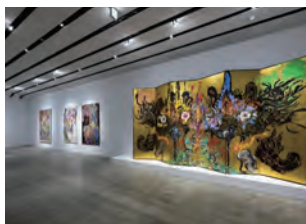
本学短期大学部卒業生で現代アーティストの小松美羽さんをお招きした特別講演会が7月27日に杉並キャンパスで開催されました。本講演会は短期大学の共通プログラムとして開講され、美術コース教授の山本雄三先生の司会のもと、小松さんが学生時代の恩師と慕う本学名誉教授の小川正明先生、美術コース教授の八木なぎさ先生も登壇しトークを展開。会場に集まった在学生に向けてたくさんのお話を聞きました。「私が今、現場でどのように生きてきたのか、これまでどんな生き方をしてきたのかをお話できたらと思います」と切り出した小松さんは、自身を支えるプロデューサーとの出会い、初めて絵を購入してくれた方との出会い、有田焼の磁器に絵付けを施した立体作品がロンドンの大英博

物館にコレクションされるきっかけとなったキュレーターとの出会いについて言及。アーティストとして筆を折らずに生きていく覚悟を決めた瞬間や、現存作家として人間性を磨くことの大切さに気付いた瞬間が、さまざまな人との出会いとつながりにあったことを明かしました。また、自身の一番の強みはチームがいてくれること、日頃から大切に考えていることとして信頼は現地で生まれるということを挙げ、「家で引きこもって絵を描くだけがアーティストの役割ではないし、世界のアートシーンや自分の目指す場所へ近づくためにはまず自分から現場に行くことが大事なんです」と話しました。小松さんといえばメディアへの露出や迫力あるライブペイントも国内外から注目を集めています。これまでの活動から人と



### 小松美羽（こまつ・みわ）

1984年、長野県坂城町生まれ。2004年、女子美術大学短期大学部卒業。独自の死生観を描いた銅版画「四十九日」がその技術と作風が高く評価を受け、プロ活動への足がかりとなる。近年は銅版画の他にアクリル画や有田焼など制作の幅を広げ、死とそれを取り巻く神々、神獣、もののけを力強く表現。出雲大社「新・風土記」奉納、大英博物館日本館「天地の守護獣」永久展示、世界最大級オークション クリスティーズへの「遺跡の門番」出品・落札、ニューヨーク ワールドトレードセンター作品収蔵など数々の功業を成し遂げる。2017年6月紀尾井カンファレンスで開催された小松美羽展「神獣〜エリア21〜」では来場者3万人を動員。2018年1月北京の「Tian Gala 2017」にてYoung Artist of the Year受賞。9月に軽井沢ニューアートミュージアムにて4年振りの美術館での個展「The World of Prayer” MIWA KOMATSU 小松美羽展〜祈り〜」開催。10月「福島ビエンナーレ2018」で金獅子狛犬賞を受賞し大山忠作美術館で「小松美羽展〜祈り〜」開催。以降、台湾のアート台北、上海のアート021にも出品するなどアジアにも精力的に進出している。12月5〜16日、日本橋三越にて2018年度国内唯一の作品販売も行う個展「小松美羽展〜大和力を世界へ〜」開催。



出会いつながることの大切さについて改めて触れ「学生の皆さんが今できることって何だろうと考えたときに、SNSもそうですが、やはりたくさんの人と出会っていろいろな考えを聞くことが重要なと思います」とコメント。「最初の頃は、絵を描くよりも人間の生きざまを見なさいとよく言われました。人間の生きざまを感じることにによって人間性は磨かれていきます。美大に入ってすぐ重要だなと思ったのは、大学の先生方は業界の大先輩だということ、まずは先生方に自分の作品を認めてもらうこと、学生だからといって受動的に考えず自分から行動すること。皆さんには、身近なところにたくさんチャンスが転がっていることに気づいてほしい。何も無駄なことはいらないです、すべての経験を大切にしてくださいね」と在学生に向けて想いを伝えました。

特別講演会から約1ヶ月後の9月2日、30日、小松美羽さんがこれまで歩んできた10年間を振り返る「The World of Prayer” MIWA KOMATSU 小松美羽展〜祈り〜」

が軽井沢ニューアートミュージアムにて開催されました。作家としての起源となった銅版画「四十九日」、大英博物館に収蔵された「天地の守護獣」（作家保存版）、映画「花戦さ」で好評を博した劇中絵画を含む作品の数々をはじめ、香港、台湾、シンガポール、ニューヨーク、ダラスから集結させた日本未発表作と2018年の新作もあわせた100点近くもの大作が一堂に会しました。初日には全国各地から集まった来館者や各種メディアが見守るなか、小松さんが大迫力のライブペインティングを披露。「もう一度、改めて原点からはじめ直す」という強い気持ちで描かれた作品には山犬とナウマンゾウのつがい並び、両端からは大きな「羽」が出現、「自分の原点に立ち返り、これまでの成長も含めて自画像のようなものを描かせていただきました」と語った小松さんに会場から大きな拍手が贈られました。会期中、約1万人もの来館者が訪れた今回の大回顧展。今後も日本のみならず世界を舞台に輝きを放ち続ける小松さんから目が離せません。



Q 5

**制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。**

作品の素材、テーマが、どのように慣習、寓意、人の心理過程、社会背景と関わっていくかを大切にしています。それと作品媒体（絵、写真、ビデオ）に固執することなく自由に使うようにしています。また作品の持つ要素が私の意志から離れて、良い意味で自分が思いもよらないものに仕上がるかと幸せです。

Q 6

**大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。**

自分がしなかった事の反省で、意見の通らない人、合わないと思った人でも向き合って話し合う訓練をしておけば良かったと思います。それを通じて自分自身も知る事ができるし、特に海外では話し合う能力は大切です。

Q 7

**海外で制作・仕事をする事の“楽しさ”を教えてください。**

海を挟んで遠くで生きてきた、社会背景や共通概念も違う人たちの中で、最高に感動する作品が共通するとき。美術というコミュニケーションがあるという不思議に感動します。

Q 8

**やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。**

やりたい事や夢があるだけで充分だと思います。他の人と比べないで、自身を見つめマイペースでやり続ける事ではないかと思います。それと人とのつながりを大事にする事。

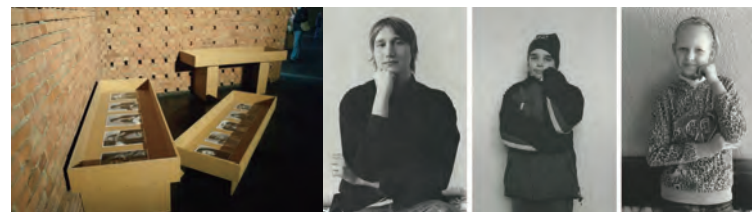
Q 9

**後輩（女子美生）に一言メッセージをお願いします。**

若い時に好きだったものというのは、年を取った時のそれと違っていつまでも心の奥底にみずみずしくある気がします。そしてそれは今の私の源泉です。是非今興味ある事、好きな物の世界を真摯に楽しんでください。



『When you wake up.』Kunstverein kjubh  
身体にある痛みを土で埋め、それを焼き外形化した陶器を、四方の壁から布で吊るされた木に置いてある。 <http://www.kjubh.de/pages/bisher2010.html>  
Photo © 2010 Dirk Königsfeld



『仕草の創造主』 それぞれ3つの箱に一つのジュスチャーをした写真が入っている。  
銀塩モノクロ写真 キリスト文化教会 ポーヘム ドイツ 2012  
Photo © 2010 Dirk Königsfeld



松山 聖子（まつやましょうこ）

美術家。1995年芸術学部デザイン科造形計画専攻卒業。2004年女子美バリ賞受賞後ドイツに渡りデュッセルドルフアカデミー、ローズマリートロッケルに師事。2011年野村財団の助成を受けリトアニアに滞在、展覧、講演ワークショップを行う。人の心理的な動き、認知の仕方など内面をどのように表面化できるか、またはしているかをテーマに作品を作っている。

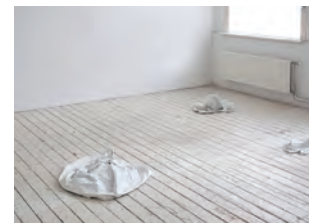
ウェブサイト <http://www.shokomatsuyama.net>  
（女子美の先輩が作ってくれたサイトです <https://www.rhymeinc.com>）

ケルンのアトリエ OPEKTA ATELIERS <http://www.opekta-ateliers.de/>

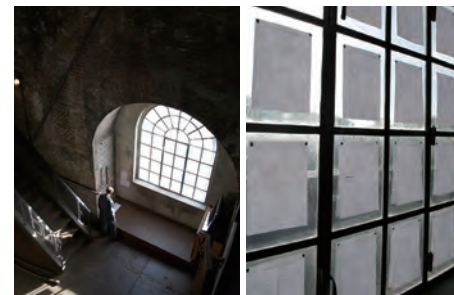
## 松山 聖子



『When you wake up』Kunstverein kjubh 部分



無題 コンクリートで出来た布。  
HET WILDE WETEN ロッテルダム 2013  
Photo © 2010 Dirk Königsfeld



『誰もいない森で木が倒れたら音はするのか?』  
なくしたものをアンゲートしたプリントを窓に展示している。  
インスタレーション LWL インドストリアルミュージアム ポーヘム、ドイツ 2011

Q 1

**なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか？**

大村文子基金女子美バリ賞をいただいたのがきっかけです。様々な国籍のアーティストと接し、自分が知らずと固執していたものから解き放されました。またヨーロッパでは「お前は何者だ」、といつもどこからか問われてる気がします。今はドイツに住んでいますが、何かをつくったり決める際に100年後の事を考える国民の持つ時間の流れの中で、外国人である故の孤独、開放感も感じながら、その問いにじっくり向き合う事が出来るのは私が制作する上で必要です。最後に尊敬出来るタフな女性アーティストが多い事も刺激になります。

Q 2

**女子美時代は、どんな学生でしたか？**

女子美には中学から通っています。中学高校は兎に角、四六時中文芸本ばかり読んでいました。乱読時代です。単館映画も好きで学校帰り（今はどうなのでしょう、当時は禁止でした）に頻繁にいきました。勿論展覧会も。女子美付属が都会にある良さですね。私の作品は物語的でと良く言われるのですがその体験から来ているんじゃないでしょうか。

Q 3

**女子美時代の印象深い思い出を教えてください。**

大学時代には当時の造形計画専攻の井上先生をはじめ先輩が現代美術に興味のある私に教室を（デザイン科だというのに）アトリエ代わりに使うように後押ししてくれて、温かく見守ってくれました。ラウシェンバーグが好きでアッサンブラージュを作ったり、まだ作り立て間もない綺麗な校舎にご迷惑をおかけしました。

Q 4

**美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか？**

正直に書きますと、小さい頃から絵ばかり描いていた私を母が女子美の中学に入学するように勧めてくれました。ですから選んだというより、気付いたら長い間女子美に居たという方がしっくりきます。今思うと女子美は中学から女子ばかりですから媚びる事なく勇ましく、自己表現（どんな形にせよ）するのが当たり前の環境に居た事は今の自分の在り方の基本になっていると思います。





## 01 | 海外サマー・スクール2018開催

本学と学術交流協定を結んでいるイギリスのバーミンガム・シティ大学において8月2日～27日に海外サマー・スクールが開催され、芸術学部生13名と短期大学部生3名の計16名が参加しました。前半の2週間はゲームやアクティビティを取り入れた会話中心の英語研修や、フォトグラム、刺繍、ファッション、3Dなどの基礎テクニックや表現方法が学べる実技研修を実施。また、バーミンガム市内にある小児病院で行われた「Community Project」では子どもたちと一緒にパペットを制作し、楽しそうな笑顔と笑い声が溢れました。サマー・スクー

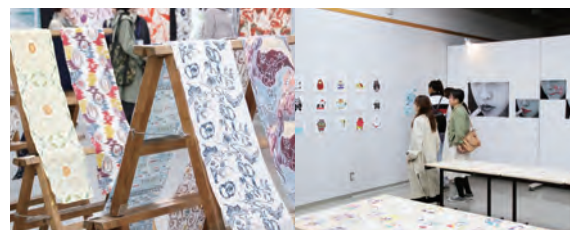
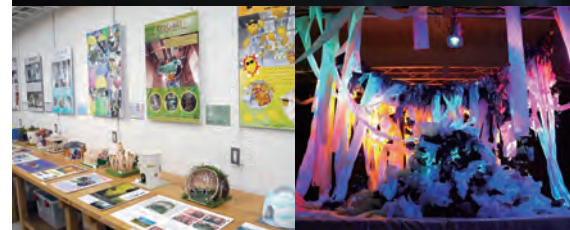
ル期間中はバーミンガムだけでなくロンドンやリヴァプールにも訪れ、世界最大級の近現代美術館テート・ブリテンやテート・モダン、テート・リヴァプールを訪問。そのほかバッキンガム宮殿やウエストミンスター寺院、大英博物館も見学することができ、新しい発見と文化比較が得られる貴重な時間が過ごせました。サマー・スクール終盤にはメインイベントである8日間のホームステイも経験し、修了セレモニーではバーミンガム・シティ大学芸術学部長のアリソン教授から学生たちに修了証書が授与されました。



## 02 | 第6回「美術教育セミナー」開催

「新学習指導要領」が公示され、美術教育においては、著しく変動するこれからの社会の中で、感性を働かせ、試行錯誤しながら新たな価値を創造していく能力の育成が注目されています。セミナーでは、文部科学省より東良雅人視学官をお招きして講演いただいたほか、小・中・高校の図工・美術教員が教育現場の実例などを発表し、全体協議など通して情報交換が行われました。新しい学習指導要領のねらいを実現するための工夫や改善について考える貴重な場となりました。

# NEWS — & — TOPICS



10月26日～28日、女子美祭が開催されました。相模原キャンパスは「厚化粧」、杉並キャンパスでは「夢想空間」をテーマに在学生の作品展示をはじめ、自主展示、ステージ発表、有志による模擬店で賑わいました。また、卒業生が手がけたキャラクターが多く描かれているサンリオカフェワゴンによる軽食の販売を実施。サンリオの新キャラクター「こぎみゅん」も相模原キャンパスに遊びに来てくれました。恒例のゲスト講演会では相模原キャンパスに声優の朴璐美さん、俳優の横浜流星さんが来校、杉並キャンパスには俳優の本郷奏多さん、声優の梶裕貴さんによるトークショーが開かれ、好評を博しました。最終日、相模原キャンパスでは学友会による打ち上げ花火が行われ、夜空を彩る花火を楽しみました。

## 女子美祭 2018





05

## Watani Al Emarat Ambassadors Program アラブ首長国連邦(UAE)高校生リーダー訪日研修2018

オープンキャンパス最終日の7月16日、アラブ首長国連邦(UAE)駐日大使館・総領事館からの協力要請より、「ボランティア精神とリーダーシップを培い、2020年にUAEで開催される万博で中心的役割を果たす」という目的による「Watani Al Emarat Ambassadors Programアラブ首長国連邦(UAE)高校生リーダー訪日研修2018」の一環で、UAEの高校生リーダー41名が杉並キャンパスに来校。オープンキャンパスの見学と本学卒

業生でデザイナーの牧野和華子先生による、キャラクターデザインについてのレクチャーと各自がオリジナルの動物キャラクター制作に挑戦するワークショップを実施しました。オープンキャンパスの見学では、本学学生の制作した作品を大変興味深く鑑賞し、また、ワークショップでは、最初は戸惑いながらも、思い思いの自由な発想で、可愛いキャラクターや奇想天外なキャラクターを制作していました。

03

## 客員教授 萩尾望都先生 オープンキャンパス特別講演開催

本学客員教授である萩尾望都先生による特別講演が、7月15日に杉並キャンパスにて開催されました。「物語を創る」をテーマに、どのように物語が生みだされるのか、お話いただきました。幼少期からさまざまな漫画を読んで過ごしてきた萩尾先生は、その日に読んだ漫画の台詞やシーンの全てを細かく覚えていたそうです。ご自身で漫画を描く際は、その記憶を思い返し参考にしながら執筆しているというお話に、会場から驚きの声

が上がりました。flowers7月号から連載がスタートした『ポーの一族』の続編『ユニコーン』の、初期の構想をラフスケッチの実演で再現。その様子はスクリーンに映し出され、来場者の熱い視線が注がれました。また、登場人物の性格や動き、物語の展開やページ構成を考えながらどのように物語を創り、描き進めていくかも解説。質疑応答の場面では多くの質問が寄せられ、60分の特別講演は大いに盛り上がりしました。

06

## 女子美とエステー株式会社の コラボ商品が登場！

消臭力・ムシュダ・脱臭炭などのブランドを持つ、日用品メーカーのエステー株式会社と本学のコラボレーション企画が行われました。今回は「トイレ空間を明るく楽しくするデザイン」をコンセプトに、本学学生が消臭力のデザインを提案。コンペ形式にて12種類のデザインが選ばれ、6月22日からWEB限定商品として、Amazonサイトで販売。常識にとらわれない自由な発想や遊び心、楽しさがつまった商品が生み出されました。



04

## 『JOSHIBISETAN みんなの七夕 届け、願いごと☆』開催

伊勢丹と女子美のコラボレーション企画『JOSHIBISETAN みんなの七夕 届け、願いごと☆』が6月27日から7月7日まで伊勢丹相模原店で行われ、本学美術学科立体アート専攻の学生による七夕飾りと立体作品が展示されました。同店2階正面には町田市相模原町からいただいた貴重な真竹が並び、錫のオーナメントの七夕飾りや色とりどりの短冊が飾られました。6月28日には学生によるワークショップ「オリジナル七夕オーナメントを作ろう」も開催され、多くの方に作品展示とワークショップを楽しんでいただける機会となりました。





## 卒業生交流会 in ソウルを開催

留学生として女子美で学び、卒業後韓国に戻って生活している卒業生と大学、卒業生同士の異業種交流や世代交流を広げることを目的とした、「卒業生交流会 in ソウル」が9月1日韓国ソウル市にて開催されました。当日は韓国で活躍されている幅広い年代の卒業生が参加、「韓国で女子美の卒業生同士が集まれる機会が嬉しかった」、「今後もこのような交流を続けてほしい」といったコメントが寄せられ、貴重な情報交換の場となりました。



## 佐藤志津 没後100周年記念

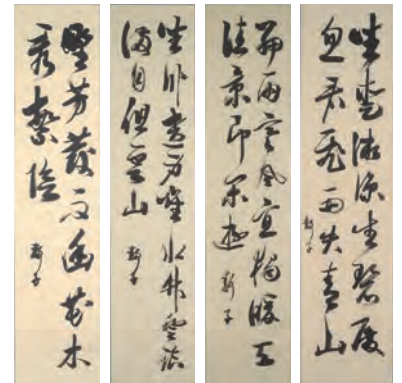
佐藤志津（1851-1919）本学初代校主・第2代校長は、下総の佐倉藩医、順天堂の第2代堂主佐藤尚中の長女として生まれました。創立者の横井玉子の意思を引き継ぎ、経営難に陥っていた女子美に寄付を募るなどして本郷菊坂校舎建築や附属高等女学校創立などの事業を成し遂げ、15年にわたり学校経営を担いました。2019年3月には没後100年を迎え、記念行事が行われます。先行して2018年7月には、佐藤志津の育った千葉県佐倉市の佐倉市立美術館の主催で「女子美術大学と佐藤志津展」が開催され、関係資料とともに多くの卒業生の作品が紹介されました。2019年3～7月、歴史資料展示室では「佐藤志津と私立女子美術学校展」を開催、佐藤志津の生涯と功績をご紹介します。



佐藤志津 大正期



私立女子美術学校菊坂校舎 明治42年(1909)7月竣工



佐藤志津 書 4点

女子美×東急ハンズ渋谷店  
ハロウィンワークショップ開催

10月8日と14日の2日間、東急ハンズ渋谷店にてプロダクトデザイン専攻2・3年生有志によるハロウィンワークショップが開催されました。8日に実施した「女子美生とつくろう!ハロウィンを楽しむモンスターリース!!」では、ダークカラーやビビットカラーのフェルト・リボンを使ってモンスターをイメージしたふわふわなリースを制作。14日には「TRICK OR MAKE 自分だけのキモかわモンスターアクセサリをつくろう」と題し



て、透明なドーム型パーツにビーズや毛糸などを施したブローチやリングなどのアクセサリ作りを実施しました。東急ハンズ渋谷店40周年を記念して実現した今回のコラボレーション企画。ワークショップ参加者は、学生たちと会話を弾ませながら自分だけのオリジナルのモンスターアイテム作りを楽しみました。

指導教員 芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻:主任教授 松本博子

客員教授 桑島十和子先生  
特別講演会開催

美術監督として第一線で活躍されながら本学短期大学部の客員教授でもある桑島十和子先生の特別講演会が6月13日に杉並キャンパスで開催されました。桑島先生は会場に集まった短期大学部1年生に向けて「世の中には本当にたくさんの仕事があるので、皆さんがこれから興味のある仕事を見つけていく一つのきっかけになれば」と、“先生”としてではなくあくまでも“女子美の先輩”として登壇。学生時代のエピソードや短大卒業後の下積み経験についてお話いただいたほか、2016年に公開された映画『TOO YOUNG TO DIE! 若くして死ぬ』のラフスケッチや美術セット、制作現場の写真をスクリーンに投影しながら美術監督の仕事内容について詳しく解説いただきました。また、これまで手掛けられたCMの制作秘話や現在携わっている新しい仕事の話題にも触れられ、講演会後にはスケッチやデザイン画、映画作品の台本など貴重な資料を公開いただきました。



## JAM

現在への起点－女子美版画収蔵作品を中心に－

**4.18(水)－5.26(土)**

当館では優秀な卒業制作、修了制作作品の収蔵を続けています。その中から本展では、1979(昭和54)年～2009(平成21)年までの30年間に渡り、美術館に収蔵されてきた版画作品と、本学版画研究室で所蔵する作品約20点を公開しました。また、卒業後も作家として精力的に活動している7組の卒業生の現在の作品もあわせてご紹介しました。

女子美染織コレクションPart7 日本の伝統と技

**9.12(水)－10.20(土)**

江戸時代を中心とした、日本の「裂(きれ)」を紹介しました。

平成30年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品展

**8.6(月)－8.10(金)**

平成30年度 女子美術大学大学院博士後期課程を修了する美術研究領域(洋画) 朝倉優佳の研究作品展を開催しました。

第40回造形「さがみ風っ子展」

**10.26(金)－11.2(金)**

毎年恒例となったさがみ風っ子文化祭運営委員会主催による相模原市内13校の小中学生の作品を展示しました。

## 女子美ギャラリーニケ

ニケキュレーターズセクション#03－帆足枝里子展－

**4.13(金)－5.23(水)**

土を中心として様々な素材を使用し、そこに偶発的に生み出される「ひび割れ」から奥深い表現を感じさせる帆足枝里子の作品を紹介しました。

世界のバリアフリー児童図書展 in 女子美  
－IBBY選定バリアフリー児童図書2017－**6.15(金)－6.27(水)**

「国際児童図書評議会障害児童図書資料センター」の2017年度コレクションを中心に紹介しました。

女子美スピリッツ2018 荘司福展

**9.14(金)－10.28(日)**

本学出身で名誉博士の日本画家 荘司福(1910-2002)の作品を展示しました。

平成30年度女子美術大学大学院 博士前期課程修了制作作品展(前期修了) 日独伊親善図画－80年前の児童画を巡って－

**6.1(金)－6.6(水)**

平成30年度前期に大学院博士前期課程を修了するアートプロデュース研究領域 田中直子の研究発表を展示しました。

自由選択で作る自分だけのカリキュラム  
女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2018」展**7.6(金)－8.1(水)**

短期大学部1年生が自由選択授業で制作された基礎造形18講座の学生作品を展示しました。

「アートミーツケア学会大会 2018年度総会・大会」  
アートを計測する エビデンスってなに？**11.3(土)－11.4(日)**

アートミーツケア学会大会2018内で「ユニバーサルアートワークショップ」を開催しました。

## 歴史資料展示室

『女子美術大学と衣服教育－その歴史と現在－』刊行記念 女子美の衣服教育展 前期 **5.23(水)－8.3(金)** 後期 **9.12(水)－2019.1.25(金)**  
『女子美術大学と衣服教育－その歴史と現在－』(2018年)の刊行を記念し、本学が現在まで綿々と培ってきた衣服教育を紹介しました。

## JAM

女子美術大学美術館コレクション特別公開 織と革

**12.3(月)－12.8(土)**

「織と革」をテーマに染織コレクションから16-18世紀のヨーロッパのタペストリーと本学出身の皮革工芸家大久保婦久子の作品を公開します。

平成30年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会

**2.9(土)－2.15(金)**

平成30年度に大学院博士後期課程修了予定者の作品発表会を開催します。ただし、開催は学位の申請状況により変更あり。

平成30年度 女子美術大学退職教員記念展

石とあそぶ 光とあそぶ

**1.9(水)－1.29(火)**

平成30年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

染織文化資源研究所研究成果報告会

**2.23(土)－3.2(土)**

女子美術大学染織文化資源研究所は2016年に文部科学省より採択された「私立大学研究ブランディング事業」に基づき、染織文化財の保存修復技術等の研究を続けてきました。本展では3年間にわたるその研究成果発表を行います。

平成30年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

**3.10(日)－3.17(日)**

平成30年度に大学院博士前期課程を修了する洋画、日本画、版画、工芸、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、環境デザイン、プロダクトデザインの各研究領域を専攻した学生の作品を展示します。

## 女子美ギャラリーニケ

第11回五大学合同写真展 ○(まる)展

**11.9(金)－11.24(土)**

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝媒大学の五つの大学でそれぞれ写真を学ぶ学生の写真展を紹介します。

女子美術大学AP(アートプロデュース表現領域)卒業・修了制作展

**1.18(金)－1.29(火)**

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・大学院生による卒業・修了制作の作品を紹介します。

平成30年度 女子美術大学退職教員記念展

石とあそぶ 光とあそぶ

**11.30(金)－12.18(火)**

平成30年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

平成30年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

**3.10(日)－3.17(日)**

平成30年度に大学院博士前期課程を修了するメディア、ヒーリング、ファッションテキスタイル、アートプロデュース研究領域の学生作品を展示します。

## 歴史資料展示室

佐藤志津没後100年記念展 佐藤志津と私立女子美術学校

本学初代校主・第二代校長の佐藤志津の生涯と功績を紹介します。

**3.8(金)－7.15(月・祝)**

撮影：末正真礼生

**2018.7.4(水)－8.1(水)**

## 「女子美術大学・ラフバラ大学交流展覧会」

「女子美術大学・ラフバラ大学交流展覧会 オリンピックと文化：過去・現在・未来・つながり」展は、女子美術大学と交流協定を結ぶイギリスのラフバラ大学との交流10周年を記念したものです。「オリンピックと文化」をテーマに、両校の教員15名がペアを組み、オンライングループでの意見交換を通じて作品制作を行った共同研究の成果でもあります。展覧会構成も出品作家でもあるリンダ デニス先生(女子美術大学)とセルビー・アンドリュー 先生(ラフバラ大学)が共同ディレクターを務めました。展覧会のみならず、シンポジウムやアーティストトークを実施し、鑑賞者がオリンピックの過去と現在を認識するとともに、未来のオリンピックを考える機会となりました。





---

## 女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学  
〒166-8538  
東京都杉並区和田1-49-8  
企画・編集 総務企画部広報グループ  
監修担当 伊藤雅敏・李谷吉也  
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.  
印刷 株式会社 ヒーローズ  
発行日 2018年11月22日  
© 2018 学校法人女子美術大学

---

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方は、お送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123  
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp  
URL <http://www.joshi.ac.jp>